

アジア近代研究の視点

—共同研究「東アジアにおける東西文明の
出会い或いは衝突」の進展に向けて—

鈴木 陽一

私は「東アジアにおける東西文明の出会い或いは衝突」というテーマを掲げ、数人の先生方の御協力を得て共同研究グループを起ち上げた。その趣旨は以下のようなものである。

前年度までの研究テーマ「近代アジアにおける伝統文化の変容」を受け、今年度以降は、アジア近代化の過程において、アジアの都市において、東西の異文明、異文化がどのように出会い、衝突し、融合していったのかを、「科学技術」、「翻訳」、「モダニズム」、「消費文化」をキーワードとして、研究していくこととした。

こうしたテーマのもとに早速共同研究に着手するはずであったが、諸般の事情により、十分な進展を見ていない。そこで、今後の共同研究プロジェクトに関する研究の視点について、私見を述べ、スタートの地点を確認しつつ、今後の共同研究の進展を図ることとした。

時代は30年遡る。バブルの真っ盛りの時代、人文学において流行していたのは、ポストモダン、ポスト構造主義、「ニューアカ」であり、この時期、批判の標的にされていたのは、構造主義及び構造主義と和解して間もないマルクス主義であった。私はその流行と「既成の権威」への批判の向こう側に、西欧文化への嫌悪、合理主義への憎悪、一言で言えば「アンチ・モダン」が透けて見え、極めて不愉快であった。そのため、当時の人文研で共同研究グループに加わり、モダニズム及び合理主義、そしてマルクス主義と構造主義を擁護すべく、ささやかな論陣をはり、「中国の近代化と民族問題」というかなり長い文章を書いた。今から見れば長いだけの稚拙なものだが、その過程で、近代化とこれを支える思想について必死に考えながらまとめたものであって、私はその結果、近代合理主義への確信と言うべきものを持つことができ、その後の研究に取り組む姿勢ができたと思っている。以下、その時期のことを想起しながら、今回のテーマのもととなった考え方を披瀝し、グループでの議論に供することとした。

ここでは、国家や民族、政治や法律の諸制度と近代化の問題については、門外漢ということで（言いたいことは山ほどあるが）一旦置いて、文学を中心とした大衆文化について考えることにする。19世紀に、軍艦、大砲、軍隊、商船、外交官、商人、宣教師らと共に、西欧からアジアに來襲した近代化の波は、特に大都市の庶民の文化の姿を大きく変えた。その波とは、それまで程度の差こそあれ一部の階級、階層の人々によって占有されていた文化を、新たな方法によって大量生産し、新たなメディアによって安価で提供するものであり、一言で言えば、コピー文化であった。

東アジアにおいては、文化の大衆化の胎動は16世紀の後半から始まり、西欧文化の到着以前にすでに相当の広がりを見せていた。それは、日本、中国、朝鮮の各国が相当に高い識字率を獲得していたこと、それと呼応して、民間で様々な形式の文学作品などが大量に出版され、流通をしていたことを見れば明らかであろう。西欧のコピー文化は、その流通のスピードと規模とを大きく変えたに過ぎない、ということさえ言えるのである。

しかし、この新しい皮袋に盛られたのは古くてカビ臭いものではなかった。時代と共に刻々と姿を変えていく大衆の文化が新たな文字となり、新たな印刷形式で市場へ出て行くと共に、全く新しい思想、文化も、大衆にとって口当たりのよいよう加工され美酒として盛られていたのである。進化論も民主主義も、革命思想もニヒリズムも、探偵小説や恋愛小説と共に、世界の空間を切り取った写真と共に、レコードやラジオから流れる新しい音楽とともに、更には動く映像と共に人々のもとに届けられた。その

この意味をもっと重いものとして我々は考えるべきではないかというのが、30年前からの私の思いである。なぜなら、19世紀から20世紀にかけてアジアの人々がそうしたものを受け止めた結果として、アジアの中で生きている今の私もあるからだ。

無論、そうした欧米の侵略と共に押し寄せた近代化の波が負の側面を有していたことは、否定する余地はない。しかし、大衆化を進めるコピー文化は、広い意味での民主主義を普及する役割を果たしたことも間違いがない。そのことは、コピー文化を心底憎み、破壊し、人々の手元に届かぬようにしたのは、侵略者の中の最も野蛮な連中であつたことを見れば明らかであろう。因みに、太宰治の遠縁にあたる菊谷栄（1902-1937、三谷幸喜の『笑いの大学』は彼へのオマージュとして書かれた。）は、大学入試と美術への夢に挫折し、エノケンの座付き作者となつて浅草で喜劇作家として活躍したが、その笑いの中の諷刺で当局に憎まれ、徴兵されてわずか三ヶ月で戦死している。これが単なる偶然の結果とは思えない。

菊谷の不在によりエノケンはもはやかつての輝きを失い、戦後も華やかな活躍をすることはなかった。そのため、また戦前の映画フィルムの保存がされていないため、我々はエノケンの、ひいては浅草のモダニズムの洗礼を受けた大衆演劇の本当の魅力を十分に理解することができないのだが、そこで生まれた様々な作品とギャグ、培われた音楽的センス、育成された才能が戦後の大衆文化の一端を担ってきたことだけは間違いがないし、その精神は伝説のラジオ番組『日曜娯楽版』や青島幸男とクレージーキャッツの『おとなの漫画』、さらには井上ひさしなどの笑い諷刺を重んじる作家たちに受け継がれていったことも付記しておく。

私の専門で言えば、中国の戦前から戦後にかけて、ホームズワトソンタイプの探偵小説を執筆していた程小青（1893-1976）という作家がいた。上海の時計屋で披露目屋の一員としてクラリネットを演奏していたが、独学で英語を学び、蘇州の中学の臨時教員となる。そこで本格的に英語を勉強し、ホームズものの翻訳に取り組むと共に自ら探偵小説を書き始め、翻訳、創作、評論、雑誌の運営を行い、後には映画界に進出し、自らの作品のプロデュースも行った。戦後は蘇州大学で教鞭を執り、創作活動はほとんど行わなかったが、公安関係の幹部が彼の作品を愛読し、ご遺族の話では、文革中も公安警察が彼を守ったという。西欧の近代と出会った若者が、様々なメディアの中で新たな文化を生み出し、それが次の世代の文化を育てていく一つの典型であり、こうした事例の中にあるものを我々が十分に汲み取ってこそ、はじめて我々がモダンを乗り越える可能性がある、私はそう考える。

だが、すでに触れたように、近代化の過程で大衆に送り届けられたものは、娯楽のみではなかった。西洋伝来の新たな思想と文化もまた、この皮袋の中に盛られていたのである。それが侵略のための道具立てであったとしても、多くの人々が閉じ込められていた当時の社会のシステムよりは間違いなく魅力あるものとして映っていたはずである。特に一神教の制約を受けないアジアでは俗流進化論の影響は極めて大きかったし、科学の欠如と法律と裁判制度の不備に苦しむ人々にとっては探偵小説もまたただの娯楽にとどまるものではなかった。さらには科学技術によって提供される汽車、自動車、ラジオに映画など様々な不思議もまた、人々の心を動かし、未来への夢と希望を与え、それが破れた時には、闘いに立ち上がる人をも生み出す力をも有していたのである。従って、近代の問題、特に西欧とアジアの関係を考える時、ジャンルごとに区切って考えることは危険である。特に科学、進化論、それに民主主義的なもの、自由と平等への憧憬を切り捨てて考察することは、この時代の本質を見失うことになる私と考えている。

以上、共同研究について私見を述べたが、アジアの近代に於いて我々は何を得てきたのかを、研究グループのメンバーと議論を交わしつつ、人文科学、社会科学、そして科学史の角度から、この一年の遅れを取り戻すべく、研究を続けていきたいと考えている。

（すずき よういち 神奈川大学外国語学部教授）